

| | |
|---------|---|
| 氏名（本籍） | 高木 修一（福島県） |
| 学位の種類 | 博士（言語学） |
| 学位記番号 | 博 甲 第 6774 号 |
| 学位授与年月日 | 平成26年 3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | Modeling of EFL Reading Comprehension Based on the Event-Indexing Model Focusing on the Role of Situational Continuity（イベント索引化モデルに基づく EFL 学習者の読解モデルの検討：状況的連続性の役割を中心に） |

| | | | |
|----|---------------------|-------------|-------|
| 主査 | 筑波大学 教授 | 博士（言語学） | 卯城 祐司 |
| 副査 | 筑波大学 教授 | | 磐崎 弘貞 |
| 副査 | 筑波大学 教授 | Ed.D. (教育学) | 平井 明代 |
| 副査 | 東京外国語大学大学院地域文化研究科教授 | Ph.D (言語学) | 根岸 雅史 |

論文の要旨

本論文は母語話者の読解を対象としたイベント索引化モデルに基づき、日本人英語学習者の読解モデルを構築することを目的としている。本研究が基盤としているイベント索引化モデルは、状況モデルを従来のように単一情報からではなく、複合的な視点で捉えている。そして、その複合的な構成要素を、同一性（登場人物）、時間性（時間情報）、空間性（場所）、因果性（因果関係）、意図性（登場人物の目的）と具体的に仮定し、これらの情報の一貫性が状況的連続性と定義され、読解の成否を左右すると考えられている。本論文では、このイベント索引化モデルを応用し、以下の3つの研究を行っている。

研究1は2つの実験により日本人英語学習者の情報統合プロセスの検証を行っている。読み手は状況モデルに新情報の統合を繰り返すことにより最終的な状況モデルを完成させるが、母語話者を対象にした研究では、読解中の情報統合プロセスは状況的連続性の影響を受けることが明らかにされている。実験1では、日本人英語学習者も母語話者同様、状況的連続性が低い情報を状況モデルに統合するのは困難であり、第二言語読解においても状況的連続性が重要な役割を果たしていることを明らかにしている。実験2では、読み手が状況的連続性の低い情報を統合する際に生じる困難性の原因解明を試みている。その結果、状況的連続性の低い情報を状況モデルに統合するには、テキストの先を予測する予期的推論の生成が必要であることを示した。

研究2では、日本人英語学習者が読解後に構築した状況モデルの検証を行っている。研究1の結果に基づけば、熟達した読み手は予期的推論の生成を行うことに長けており、より多くの状況的連続性の一貫性を保持することができる。そのため、情報統合プロセスを経て最終的に完成された状況モデルは状況的連続性を反映し、熟達した読み手ほど、より多くの情報を含んだ精緻な状況モデルを構築できると考えられる。実験3においては読解熟達度の異なる2群の高校生を、実験4においては高校生と大学生の2群を、そして実験5においては第二言語読解スパンの異なる2群の大学生を対象とし、読解後に構築された状況モデルを比較している。実験3では2群間で状況モデルの違いは見られなかったが、実験4及び5においては違いが見られた。従って、読解熟達度が高い学習者ほど読解中により多くの情報の統合を行うことができ、その結果として精緻な状況モ

デルを構築していたと結論付けている。また実験 3 から実験 5 において、状況的連続性の影響はその種類によって異なっていた。実験 4 においては高校生と大学生の状況モデルの差が因果性の理解に見られたのに対して、実験 5 においては第二言語読解スパンの異なる 2 群の状況モデルの差が空間性の理解に見られていた。そこで、実験 6 では状況的連続性の影響が情報の種類によって異なるかを検証した。その結果、同一性の状況的連続性が他の 4 種類の状況的連続性よりも影響が顕著であることが明らかとなった。そのため、日本人英語学習者は同一性の状況的連続性の一貫性を優先的に保持しようとしていると結論づけた。

研究 3 では、研究 1 及び 2 の成果に基づき、状況的連続性に基づいた読解指導の効果について検証を行っている。状況的連続性が高い情報は他の情報との結び付きが強いことから、状況的連続性が高い情報の活性化を行うことにより、状況モデルの構築、統合プロセスが促進されると考えられる。実験 7 では、状況的連続性が高い情報の活性化を促す読解発問が、読み手の情報統合プロセスに与える影響を明らかにした。読解中の発問が、状況的連続性が低い情報の統合を促進しているのである。実験 8 では、読解後に与えられる状況的連続性が高い情報が、言語的手がかりとして与えられても、読み手は状況モデルを精緻化することはできないことを示した。実験 9 では、読解後の状況モデルにおいては、状況的連続性が高い情報は他の情報と結び付いていないことを示した。

以上の実験結果をまとめ、日本人英語学習者と母語話者の読解モデルの主な違いとして大きく 2 点を挙げている。1 点目は、状況的連続性は読解中の情報統合プロセスにのみ影響し、読解後の状況モデルにおいては影響が見られないことである。従来の研究においては、読解中の情報統合プロセスと読解後の状況モデルの両方を同時に検証した研究は少なく、状況的連続性は読解中及び読解後の状況モデルにそれぞれ影響していると考えられてきた。2 点目は、日本人英語学習者は同一性の状況的連続性を優先していることである。同一性の状況的連続性の一貫性が優先されていることについては、第二言語学習者は読解熟達度によって制限されるために、5 種類全ての情報の連続性を保持することができないことに起因しているとしている。

審査の要旨

1 批評

本博士論文は、イベント索引化モデルに基づいて日本人英語学習者の読解プロセスをモデル化することを目的としている。本論文は、母語話者を対象とした先行研究に基づき、日本人英語学習者を対象とした複数の実証研究を行った。そして、状況モデルの構成要素の具体性というイベント索引化モデルの特性を活かし、第二言語学習者の読解プロセスの特徴を解明した。その上で、同学習者のモデル構築を行い、その妥当性について議論を行っている。本論文の優れている点は、大きく次の 3 点にまとめられる。

第一に、本博士論文の独創性の高さである。本論文は母語話者の読解モデルであるイベント索引化モデルを第二言語読解に応用し、日本人英語学習者の読解プロセスの特徴を解明しようと試みた。母語話者の読解プロセスと日本人英語学習者の読解プロセスの差異を具体的に示した点は高く評価でき、特に、状況的連続性の役割に違いが見られることを明らかにし、第二言語学習者は登場人物に関する情報に注目して読解を行っていることを示したことは、読解研究に寄与する貴重な発見である。

第二に、計画の綿密性が挙げられる。本論文は 9 つの実験からなる 3 つの研究によって構成されている。また、イベント索引化モデルの第二言語読解への応用可能性については未知であった。本論文が、母語話者を対象とした実証研究を丁寧に実施することにより、その解決を試みている。また、それぞれの実験に関しても、予備実験を通じた着実な実験計画を積み重ねていることは評価に値する。

第三に、本博士論文が与える教育的示唆の可能性の高さが挙げられる。本論文には、教育現場への応用を意識した実践的な実験計画が含まれており、イベント索引化モデルに基づく読解指導の効果について複数の実証

実験を行っている。研究 1 及び研究 2 の成果に基づいた研究 3 において、イベント索引化モデルに基づく読解指導として、読解中の発問及び読解後の言語的手がかりの有効性を検証した。その結果として、読解後の言語的手がかりの効果についてはその有効性が支持されなかったが、読解中に状況的連続性の高い情報を発問することによって状況的連続性の低い情報の統合を促進できることを明らかにした。これらの教育的示唆に富む発見は高く評価できる。

しかしながら、本博士論文には複数の課題が存在しているのも事実である。以下、主な課題として 3 点を挙げる。

第一に、本博士論文における実験間の考察の整合性である。本論文が焦点を当てている状況的連続性の役割について、実験によって必ずしも整合性のとれた議論がなされていないところもある。実験間で各情報の状況的連続性の影響が異なる点について、主にテキスト要因が理由として挙げられているが、実験間では協力者を含めた様々な実験デザインに違いがある。従って、複数の実験間の共通点及び差異点を明確にし、各実験を通して整合性のとれた緻密な考察が必要である。本論文では複数の物語テキストが採用されているが、それらと研究結果の関係は多いに考えられ、その議論が加われば、結果の解釈が厚みのあるものになるであろう。さらに個別のテキストや読み手の観点から、質的に解釈する部分があるとなお良い。

第二に、本博士論文の研究手法についてである。本論文は複数の量的研究によって構成されているが、質的研究が必要な箇所が散見される。例えば、実験 2 において発話プロトコル法を用いた検証を行っているが、質的データへの言及はほとんど行われていない。量的データの分析結果から、状況的連続性の低い情報の統合には予期的推論の生成が必要と結論付けられているものの、どのような予期的推論が必要なのかといった具体的な事例までは言及されていない。状況的連続性はテキスト要因によって影響を受けるのであれば、実験テキストを質的に分析することによって更なる示唆が得られるものと考えられる。

第三に、本博士論文によって提案された第二言語読解のモデルの妥当性についてである。本論文の第二言語読解モデルは、複数の研究成果に基づいて構築されたものではあるが、その妥当性の証拠は十分とは言い難い。特に、本論文で行った実験はいずれも日本人の大学生及び高校生を対象としており、一般化可能性の面で限界があると考えられる。幅広い協力者を対象とした実証実験を行うことで、本研究の意義は一層高まるであろう。

こうした一定の課題はあるものの、本論文は全体的によくまとまっており完成度が高く、イベント索引化モデルに基づき、日本人英語学習者の読解モデルを解明するための意味ある研究であり、分野の知識の向上への高い貢献や読解研究への大きな寄与が期待され、高く評価できる。

2 最終試験

平成 26 年 1 月 21 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。